

難民のために、難民とともに

[www.japanforunhcr.org](http://www.japanforunhcr.org)

# With You

JAPAN FOR



UNHCR

国連UNHCR協会

国連UNHCR協会ニュースレター「ウイズ・ユー」

2021年6月 | 第45号



特集

レジリエンス・立ち直る力  
——逆境を力に変えて

難民はつらい。大変だ。弱い立場で多くの助けが必要だ。  
でも、想像を絶するような困難の中であって、  
人間の持つはかり知れない強さと  
可能性を体現している存在でもある。

今回の「With You」では、難民の困難に立ち向かう強さと乗り越える力、そして希望を特集します。  
難民の強さ、それは人間が本来持つ強さでもあります。日本に生きる私たちの中にも、  
その強さは、きっとあります。この一つひとつの物語は、あなたの物語でもあります。

立ち向かう。乗り越える。  
それは、すべての人間が持つ強さ。

## あなたに伝えたい 5つの物語

人として、女性として、親として、耐え難い暴力や  
迫害を受けながら、決してそれに屈しなかった  
人々。自分の存在を否定されたり理不尽な差別  
を受けて、行動を起こし働きかけた人々。  
コロナ禍で社会が不安を抱え、多くの困難に直面し  
ている今だからこそ、お伝えしたい物語です。



### “苦しみを愛に変えて—女性たちとともに”

「私は家も家族も仕事も失くし、すべてを失いました。  
幾度もレイプされ、夫と4人の子どもたちを殺されました」。  
コンゴ民主共和国からの難民、サブーニ・フランソワーズ・チクンダさん(49歳)は1994年のルワンダ大虐殺で  
夫と子どもたちを殺され、その後コンゴ民主共和国で武  
装勢力に誘拐されて拷問を受け、数年間性的な奴隷とし  
て捕らわれました。

3年前、ウガンダに逃れてきたサブーニさん。母国で英語  
の教師だった彼女は、難民居住地で子どもたちに英語を  
教え、UNHCRの支援を受け設立した女性センターで洋  
裁など職業訓練を提供しています。また、居住地に逃れて  
いる、何百人という性暴力の被害者のカウンセリングを行  
うなど、難民を支える活動が評価され、彼女は2020年の  
「ナンセン難民賞」地域賞に選ばれました。

「女性たちが経験した苦しみを忘れて、新しい人生を始め  
る手助けをしたいのです」と語るサブーニさん。想像を絶  
するような困難に遭いながらも、苦しみを経験した女性た  
ちが人生をやり直せるよう献身的に支える彼女は、人間  
のはかり知れない強さと素晴らしさを教えてください。

#### UNHCRのSGBVに対する取り組み

性とジェンダーに基づく暴力(SGBV)や性的搾取の被害  
者の保護と支援は、UNHCRの最優先事項の一つです。  
UNHCRは女性をはじめすべてのジェンダーの人々の命  
と尊厳を守るため、以下のような支援に尽力しています。

- ◎被害者への医療支援 ◎被害者と家族への心理社会的ケア
- ◎迅速な保護と通報に関する法的制度の整備
- ◎被害者への職業訓練や自立支援
- ◎性暴力や児童婚、女性器切除などに関する啓発活動

## “会えない歳月。そして7か月の海での漂流の末に”



ロヒンギャ難民のナマーシャさん(24歳)は、2016年に生活費を稼ぐために単身マレーシアへ渡りました。その後マナーではロヒンギャへの迫害が激化、妻のビビさんは娘のナシュミンさんとバングラデシュに避難します。そして、夫とマレーシアで再会するために小舟に乗りました。しかし、約300人のロヒンギャ難民を乗せた舟は入国を拒まれ続け、海上をさまよいます。船上で人々は暴力を振るわれ、レイプされ、食料も水も不足し約30人が死亡するなど極限状態に。

7か月後、インドネシア北部にたどり着いてUNHCRに保護され、一家はついに再会を果たしました。消息が途絶え、妻と子はもう亡くなったと思っていたナマーシャさん。「再会した日は私の人生で最も幸せな日でした。私たちは無国籍で家もなくさまよっています。世界中の人々にお願いします。どうぞ、私たちに解決策を見つけてください」。

### UNHCRのロヒンギャ難民支援

海路で避難を試みる人々が後を絶たないロヒンギャ難民。しかし、ボートの転覆や暴力・搾取の被害、強制送還など多くの問題が発生しています。UNHCRは難民に海路で避難する危険など情報を提供し、シェルターや援助物資の提供、保護者のいない子どもの保護を行う一方、関連諸国に対し難民の強制送還や受け入れ拒否等を行わないよう働きかけています。

## “パキスタン初の難民女性の医師に。父と突き進んだ険しい道”

保守的なアフガン人のコミュニティでは、難民の少女が学校に通うことはほとんどありません。しかし、13歳でアフガニスタンからパキスタンに避難したアブドゥルさん(49歳)は、娘のサリーマさん(28歳)が3歳の頃から教育を受けさせました。「娘は逆子で危険な状態でした。それで私は、無事に生まれたら男でも女でも医師に育てる、と誓ったのです。娘が3歳の時から、ドクターサリーマと呼んできました」。

周囲から反対されても、彼は昼も夜も働いて娘の教育を支えました。そして必死で勉強に励んだサリーマさんは、奨学金制度に合格しついに医学への扉を開きます。約140万人のアフガン難民が暮らすパキスタンで、初の難民女性の産婦人科医となったサリーマさん。「父のたゆまぬ努力と強い意志が、私に困難を乗り越える強さをくれました。女性たちを救うことが私の義務だと思っています」。



### UNHCRの高等教育支援

難民の子ども半数は教育の機会を失っていますが、特に中等教育以上の機会は限られ、高等教育に至っては約3%という極めて低い数字となっています。UNHCRは1992年から難民の高等教育の支援プログラム(DAFI)を実施し、アフガニスタンやパキスタンをはじめ世界54か国で1万8千人以上の大学進学を拓いてきました。難民の若者にとって大きな希望となっています。

## “家族と離れ、難民キャンプで夢を追う14歳”



日頃から「難民であること」「子どもであること」そして「女性であること」という3つの壁にぶつかりながら、難民の少女たちは懸命に生きています。

2020年2月、当協会はケニアの現場を視察し、南スーダン難民のレイチェルさん(14歳)に会いました。物心つく前にカクマ難民キャンプに逃れてきた彼女は、UNHCRが支援する、カクマで唯一

の寄宿学校に通っています。父やきょうだいは南スーダンに残り、母はウガンダに逃れ、家族でただ一人、ケニアで親族と暮らしています。

「将来の夢は?」と尋ねると、即座に「脳神経外科医です」と答えた彼女。予想外の具体的な答えに驚いて理由を聞くと、「南スーダンでは、戦闘や病気のために病院に行っても医師がいなくて、治療や手術が受けられず人々は苦しんでいます。私は脳神経外科医になって南スーダンに戻り、人々を助けたいのです」と真剣なまなざしで語ってくれました。

### UNHCRの子ども支援

家や家族を失い、暴力を受けたり目撃して心に傷を負い、教育が受けられないことも多い難民の子どもたち。UNHCRは彼らの未来を守るために以下のような支援にあたっています。

- ◎家族との再会支援／里親の紹介
- ◎カウンセリングなど心のケア
- ◎教育支援(学校の修復／建設、教科書や文房具等の支給、授業料の補助、奨学金など)

## “アメリカでヘイトメールを受け取って”

ソマリア難民のムスタファさんは、アメリカに来て難民の問題が政治化されているのに気づきました。それでSNS等に「難民であるとはどういうことか」という記事を上げるようになったのです。するとマークという男性が「アメリカは難民を歓迎しない」と否定的なコメントを多く送ってきました。

「それで僕はこう返したんです。『コーヒーでもどう?』と。実際に会って10分、僕たちは互いに父親を亡くし共通する部分があることを知りました。互いに、相手が間違っていることを証明するつもりだった場で。

難民は、自分で選んでもいない状況を強いられただけの人。困難に負けない強さを持ち、人生への希望を捨てません。難民も他の人々と何も変わらない、ただ近所に住む隣人です。『その人の物語を知ったら、憎むことはむずかしくなる』これは、マーク自身が僕に言った言葉です。今ムスタファさんは、地域住民と難民が出会い、共にエスニック料理を楽しむなど交流し理解を深める機会を提供しています。

### UNHCRの最終的な目標とは

難民が尊厳と平和をもって生活を再建できるような解決策を見つけることが、UNHCRにとって最終的な



目標です。世界各地で難民の人権と尊厳が守られ、教育や医療等の社会サービスにアクセスできるようサポートするとともに、難民への理解と共感を促進し、差別をなくすための啓発や政策提言活動を行っています。

# 南スーダンから前橋市へ。 市民と共に走り続ける 南スーダン選手団

2011年に独立した、世界で最も若い国、南スーダン。紛争が続き、約240万人がウガンダなど近隣国へ逃れ、国内でも約150万人が避難生活を送っています。2019年11月から前橋市は、その南スーダンから東京2020オリンピック・パラリンピックを目指す選手団（コーチ1人、選手4人）の長期事前キャンプを受け入れています。日々練習に励む選手たちと彼らを支える前橋市の取り組みを取材しました。



日本語学校にて。今年3月の卒業式ではアブラハム選手が在校生として日本語でスピーチした

来日当初から、日本語学校で勉強している選手たち。アブラハム選手（22歳・1500m）は授業の後、一番好きな日本語を教えてくださいました。「『ありがとう』です。実は僕は母国で幼い頃「アリガ」と呼ばれていたのです。初めて聞いた時は驚きましたが、とてもうれしかったです」。

アクーン選手（19歳・400m／400mハードル）は言います。「日本が好きでいつか行きたいと思っていたので、前橋での長期キャンプが決まった時はうれしかったです。南スーダンでは競技トラックもハードルもなかったのが、今の環境に感謝しています。僕の友人はケニアのカクマ難民キャンプでトレーニングを続けています。水やシェルター、教育など、UNHCRの支援は重要です。支援者の皆さんにはご支援を続けてほしいです」。

コーチのジョセフさん（60歳）は熱心こう話してくれました。「世界の多くの国に行きましたが、前橋の人々はみな親切で分け隔てなく、本当に素晴らしいです。合宿が終わって帰国しても、また必ず戻ってきたいです。（当協会の職員に向かって）もうあなたも私の妹ですよ！」



前橋市のグラウンドで、冷たい「からっ風」の中を走るアクーン選手。日本人コーチ、通訳も交えての練習

来日当初は、一日三食を食べることに慣れず、日本語も分からず苦勞していたという選手団。取材中も、通りすがりに笑顔で選手に声をかけていく市役所職員の皆さん、授業と寮生活をサポートする日本語学校の方々、グラウンドでの練習に付き添うボランティアの日本人コーチと通訳の方々など、一人ひとりが選手団をまるで家族のように見守っていることが伝わり、その素朴な温かさにこちらまで嬉しくなりました。ジョセフコーチの言葉は、決してお世辞ではないことがよく分かりました。

前橋市は、オリンピック後も南スーダンとのスポーツ交流を続け、毎年2人の選手を半年のトレーニングに招聘すると発表しました。その取り組みはさらに多くの人々を巻き込んで、市民同士の絆を深め、両国の架け橋となる人材を多く生み出していくことでしょう。

取材協力：前橋市、Fuji Language School

唯一の女性、ルシア選手（20歳・100m／200m）。オリンピックで予選突破を目指す。将来は医師を目指している



## 特別インタビュー 日本のシリア難民学生・スザンさん

皆さんは、日本にも多くの難民が暮らしていることをご存知でしょうか。UNHCRの支援を受け、日本の大学院で学ぶスザンさんに話を伺いました。



### ■ こんにちは！ご自身について教えてください。

シリア出身のスザンと言います。趣味は音楽鑑賞、読書、写真撮影、旅行です。ベジタリアンフード、お寿司も好きです。RHEP（難民高等教育プログラム）を通じ大学院で学んでいます。

### ■ いつ日本に来ましたか？第一印象は？

2018年です。日本で勉強することは夢の一つでした。私は幼い頃から「ジョジョの奇妙な冒険」など多くのアニメを見て、日本に魅了されていました。大変なことの一つは満員電車に乗ることですね。日本の自然の美しさはリラックスできて平和を感じて大好きです。日本の技術、歴史にも興味を持ちました。戦後に復興を遂げたことは、他国にとって良いお手本だと思います。

### ■ なぜRHEPに応募しようと思いましたか？

私はシリアで、希望通りに教育を修了することができませんでした。大学生の時は、戦闘の中を通学しなければならず、強いストレスを感じていました。でも、どんなにつらくとも単位だけは取ると決めていたのです。なんとか卒業しトルコに移りましたが、教育を続けるのは困難でした。日本にはRHEPというチャンスがあり、日本で修士号を取るという夢が叶うと思いました。今大学院の修士課程で国際関係を勉強しています。

### ■ 日本で一番うれしかったことを教えてください。

日本に来て一番うれしかったのは大学院に合格できたことです。そのために一生懸命勉強しましたから。その後、前から行きたかった長崎に行きました。リラックスできて驚きに満ちた旅でした。平和公園は素晴らしかったです。長崎がどれだけの苦難を経験し復興したのかを感じることができました。長崎は希望の街であり、私にとって特別な場所で本当に大好きです。

### ■ 日本に来る前の生活はどうでしたか？シリアの最も恋しいことは？

シリアでは紛争のさ中で、その記憶が今も頭に強くこびりついています。家族や友人が一番恋しいです。紛争前のシリアは本当に素晴らしい場所でした。人々は本当にフレンドリーで、訪れる人をできる限り歓待しようと努めます。私のお気に入りの場所はクラック・デ・シュヴァリエ城です。ジブリアニメの城のモデルとも言われます。山の上にそびえるとても美しい場所です。

### ■ 日本の人にシリアの何を一番知ってほしいですか？

シリアは長い歴史を持ち、ダマスカスは世界で最も古い街です。世界最古の文字や物語も生まれ、パルミラ帝国のゼノビア女王も有名です。多くの有能な人々が暮らし、地中海に面していて四季があり、とても美しい国です。ピスタチオやオリーブオイルなども有名です。平和になったら、ぜひシリアを訪れてほしいです。

### ■ このニュースレターのテーマ「立ち直る力」という言葉から、誰を連想しますか？

最近亡くなった私の母です。母は癌を患っていましたが常にファイターでした。彼女は4度の転移と闘い、痛みを抱えていましたがいつも笑顔でした。私たちに常に最善を尽くすよう話し、支えてくれました。何が起ころうとも、夢を実現するため強くありなさいと教えてくれました。「レジリエンス」という言葉は私にとって、常に私の母を象徴する言葉です。

### ■ 日本での勉強を終えた後、何をしたいですか？

日本で博士号まで終えたら、難民をサポートする機関で働きたいです。自分が多くの人に支えられてきたように、多くの人を支えたい。一番働きたいのはUNHCRです。

### ■ 日本の支援者の皆さんへメッセージをお願いします。

皆さんのすべてのご支援に、とても感謝しています。このご支援なしに、私は今こうしてここにいることはできませんでした。私はこの奨学金のおかげで前へ進むことができました。恩返しのために、言葉だけでなく行動で示したいです。世界には、社会に貢献したいと願ってもその手段がなくサポートも得られない難民が多くいます。

皆さんの支援はとても重要です。人々の人生を変えることができます。社会の一員としてスキルを身に付けて前へ進み、難民が奪われ拒否されている権利を取り戻し、すべての土台となります。私はこのご支援を、世界で苦しんでいる人々のために広げたいと思います。こうしたサポートが必要なすべての人に支援が届くことを願っています。

### UNHCR難民高等教育プログラム (Refugee Higher Education Program – RHEP)とは：

日本に住む日本国籍を持たない難民の方が、奨学金を受け日本の大学で就学できるよう支援するプログラム。UNHCR駐日事務所と国連UNHCR協会が運営し、12大学がパートナー校です。  
\*2021年5月現在



今号の表紙



「歩いて戦闘から逃げてきました」  
2020年11月、南スーダンから  
コンゴ民主共和国に逃れたベ  
ティさん。UNHCRの支援で農  
業を始め、生後7か月の娘を背  
に畑を耕しながら、笑顔向け  
てくれました。



東京マラソン2021チャリティ  
2021年10月17日(日)開催予定

東京マラソン2021チャリティへ  
ご寄付くださった皆様には、  
心より感謝申し上げます。  
皆様からのご寄付は、紛争で故  
郷を追われた難民の子ども・若  
者の生きる意志につながるス  
ポーツや教育の支援に役立た  
せていただきます。

※寄付金受付は、2021年3月  
31日(水)に終了いたしました。  
詳しくは以下ウェブサイトをご  
確認ください。

◎東京マラソン2021チャリティ  
公式ウェブサイト  
<https://www.marathon.tokyo/charity/>

国連UNHCR協会は東京マラ  
ソン2021・2022チャリティ事  
業の寄付先団体です。

WithYou

国連UNHCR協会ニューレター  
「ウィズ・ユー」  
第45号 | 2021年6月

発行  
特定非営利活動法人 国連UNHCR協会  
[国連難民高等弁務官事務所・日本委員会]  
〒107-0062  
東京都港区南青山6-10-11  
ウェスレーセンター3F  
Tel.0120-540-732  
Fax.03-3499-2273  
[www.japanforunhcr.org](http://www.japanforunhcr.org)

編集  
国連UNHCR協会

デザイン  
NDCグラフィックス

印刷  
凸版印刷株式会社

◎Japan for UNHCR  
本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

私は高校生の頃から各国へ単身で赴  
き、支援活動を行ってきました。やり  
がいを感じる一方、個人での活動の  
限界を感じる時もありました。国連職員を目  
指して大学進学し、大学院在籍中にUNHCR

駐日事務所働き始め  
ました。日本の難民や難  
民申請者のコミュニティ  
を強化する仕事を担当  
し、その後UNHCRボス  
ニア・ヘルツェゴビナ事  
務所に赴任し、90年代  
のボスニア戦争の被害  
者である国内避難民  
(IDP)支援、欧州難民危  
機の際はシリア等から  
の難民保護にあたりま  
した。現在はナイジェ  
リアでボコ・ハラム等武  
装集団から逃れる約290  
万人のIDP支援や隣国カ  
メルーン等から逃れて  
くる6万5千人以上の難  
民保護に携わっています。

最もやりがいを感じるのは、難民が生活  
を立て直すお手伝いができることです。  
緊急支援だけでなく、失った身分証明  
書の再発行や家族との再会支援など、  
やりがいがある部分には難しさもつき  
ものです。資金は限られており、苦境  
にある多くの人々の中でより脆弱な  
人々を助ける決定をしなければなり  
ません。私たちの仕事は声なき人の  
声を拾い、難民がより良い生活を見  
出すサポートをし、皆様からいただ  
いた資金を最大限活用することです。

個人的には、子育てと仕事の両立も  
大変だと感じます。2016年に長男を  
出産しボスニア・ヘルツェゴビナで  
は子連れ単身赴任でした。昼休みに授  
乳に帰ったり、息子を抱いたまま難民  
の相談を受けたり、出張に同伴させ  
たこともありました。ナイジェリア勤  
務に息子は夫に任せて単身赴任に。  
2020年に長女を授かり、私と共に  
ナイジェリアで暮らしています。日  
本では必要ない予防接種、腸チフス  
やマラリアの予防、仕事の合間の搾  
乳など大変なことも多々あります。

ナイジェリアで最も深刻なのは、北  
東部での絶え間ない襲撃と政府軍の  
応戦による不安定な状況です。また、  
カメルーン難民を受け入れる南部で  
は資源の共有も限界です。新型コロナ  
ウイルスの影響で物資輸送や支援

が滞り、難民や国内避難民はさらに  
深刻なリスクにさらされています。  
UNHCRは北東部におけるIDPキャン  
プおよび南部の難民居住地での保護  
活動、支援物資の提供、最も脆弱な  
人々の生計支援などを行っています。

From  
the  
Field

難民支援の現場から

23

進藤ブラーテン美生 しんどう・ブラーテン・みお



ナイジェリアの国内避難民キャンプにて  
(コロナ禍の発生以前に撮影)

別々の国に離れ離れにな  
った難民の家族の再会  
支援もUNHCRの仕事  
です。長期間の複雑な  
法的手続きや交渉を経  
て、再会の瞬間に立ち  
会える時が一番幸せを  
感じます。一番嬉しか  
ったのは、難民の夫婦  
の元に生まれパスポー  
トを持たなかった、難病  
を患う子どものケース  
です。父親が難民と認  
定された国と交渉して  
子どもに特別旅券を発  
行してもらい、母親と子  
どもを父親の元に送り  
出すことができました。  
「これで適切な医療を

受けることができる」と安堵しました。

UNHCRの目的は難民や庇護を求め  
る人々の権利を保護することです。  
政府による国際法の順守を監視し、  
難民の権利を主張し、緊急援助や物  
的援助を提供します。この目的に向  
かって、職員が一丸となり達成を目  
指します。

私が生まれたとき、父は「美しいとい  
える生き方がある」とすれば、それは  
自分を鮮明にした生き方であるとい  
う、むのたけじさんの一言から私を  
美生(みお)と名づけてくれました。  
愛情たっぷり育ててくれた両親、祖  
父母に感謝し、名前負けしないよう  
な人生にしたいと思っています。

皆様のご寄付は、難民 / IDPキャン  
プでのテント、食料やカウンセリング  
となり、難民にとっての希望です。  
UNHCRナイジェリア事務所スタッ  
フ一同、支援者の皆様に深く感謝し  
ています。ご寄付が無駄にならない  
よう最善を尽くして参ります。今後  
ともよろしくお願い申し上げます。

プロフィール……UNHCRナイジェ  
リア准保護官。製菓専門学校卒業後、  
社会人経験を経て、早稲田大学国際  
教養学部卒業。東京大学大学院修士課  
程修了後、博士課程在学中。2013年  
よりUNHCR勤務。駐日事務所、ボス  
ニア・ヘルツェゴビナ事務所(JPO  
派遣制度)を経て2019年より現職。

6月20日は「世界難民の日」!

2000年に国連によって制定された「  
世界難民の日」。紛争や迫害で家を追  
われた難民や国内避難民に思いを寄  
せ、連帯を表す日です。今年も「#難  
民とともに」をキーワードに、音楽  
とスポーツで「生き抜くチカラ」を  
応援するイベントを開催します。

詳細はこちらから! <https://unhcr.will2live.jp/music2021/>

